

第1回支援者支援研究会

公開講座

Research Meeting Implementation Report

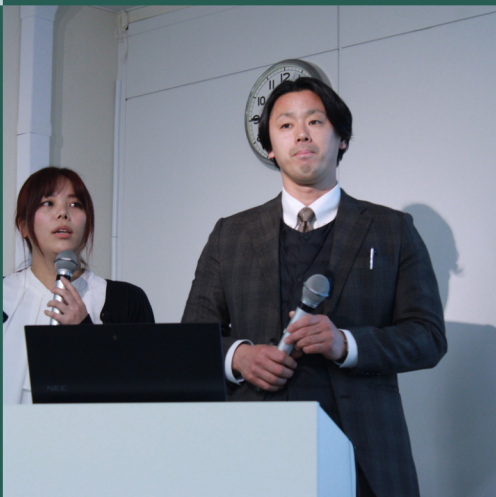


TABLE OF CONTENTS

- 01 イベント概要
- 02 プログラム
- 03 参加者の声
- 04 基調講演
- 05 支援者支援実践報告
- 06 対談・インタビュー
- 07 質疑応答

イベント概要

支援者支援の実践を考える勉強会

この研究会は、児童相談所等の子ども家庭支援のための機関や児童養護施設等の子どもの入所施設の職員向けの専門的な講座です。株式会社コドケンが主催する「支援者支援コーディネーター養成講座」を受講された団体や職員の方々の学びや実践内容を共有し、支援者支援学の発展に寄与することを目的としています。それと同時に、養成講座を受講されていない関係機関の方々にも広く公開する形で実施する記念すべき第1回目の研究会です。

1 日時

2025年2月16日（日曜日）
13時30分開始 17時00分終了

2 会場・定員

銀座ユニーク貸会議室G401カンファレンスルーム
（東京メトロ日比谷線東銀座駅徒歩1分）
ZOOMミーティングによるオンライン配信を組み合わせたハイブリッド方式
後日、アーカイブ動画の視聴有り

3 定員

会場参加 50名
オンライン参加 100名程度

4 参加料

[一般の方] 5,500円（消費税込み）

[基礎講座修了者] 無料※

※支援者支援コーディネーター養成講座2024の基礎講座を修了された方



プログラム

[総合司会] 須江泰子（日本社会事業大学専門職大学院専任講師）

13:30	基調講演 なぜ、今、児童相談所や児童養護施設等の入所施設に支援者支援が必要なのか。講師が提唱する「支援者が支援されてこそ子ども家庭支援が成り立つ」その意義をお伝えします。	支援者支援コーディネーター養成講座講師 日本社会事業大学名誉教授 藤岡孝志
14:45	支援者支援実践報告 支援者支援コーディネーター養成講座での学びを実践につなげるために試行錯誤している施設の取組内容をご報告します。各団体における導入や実践の道しるべになる報告です。	児童養護施設希望の家（東京都葛飾区） 谷沢健人 齋藤倫奈
15:25	対談・インタビュー 支援者支援の実践に取り組もうとされている団体からゲストをお招きして、「支援者支援への期待と展望」をトークテーマに進めます。それぞれの施設運営の現状や課題を踏まえながら、支援者支援の実践のあり方などについて考察します。	[ご出演] 児童養護施設希望の家（東京都葛飾区） 施設長 佐藤孝平 児童養護施設愛泉寮（埼玉県加須市） 副施設長 木村康平 児童養護施設 子供の家（東京都清瀬市） 副施設長 能村 愛 [インタビュアー] 日本社会事業大学社会福祉学部福祉援助学科准教授 宇野耕司
16:45	質疑応答 参加者様の質問や意見について、出演された方々がお答えします。	

参加者の声

参加者属性	会場参加	オンライン	合計
一般参加者（有料）	10	15	25
基礎講座修了者（無料）	6	16	22
出演者・スタッフ	10	—	10
合計	26	31	57

支援者支援が当たり前

語りの場の重要性、場の設け方や日頃のコミュニケーションなど、皆さんの話を聞いて用意することがまず大切なのだと学びました。支援者支援が様々な組織に浸透していくこと、当たり前の考え方になっていくと良いなと心から感じました。

自分だけじゃない

貴重な学びと気づきの機会を頂き、誠にありがとうございました。全く違った業種からの参加でしたが、共感疲労への対応と取り組みという視点では、ほぼ同じと感じました。悩み、解決を求めているのが自分だけではないと知ることが出来、大きなヒントを頂ける、本当に貴重な講座でした。ありがとうございます。

率直な感想に親近感が湧いた

講座を受けられた方の率直な感想は親近感が湧きましたし、どの施設も課題を抱えながらも前を向いて乗り越えようとしている様子も新鮮でした。また、藤岡先生が私なら絶対に困るという内容の質問に対して、とてもポジティブに捉えられていたことについては言葉が見つかりませんでした。

私も一員になりたい

本当に参加できて良かったです。施設や児童相談所勤務時代足りなかったこと、ぶつかってきた壁を思い出し、その際出会えたら良かったなと思いました。支援者支援は、職員の人生へ与える意味は大きく、この積み重ねは子ども、家庭へ還元される大切なエネルギーだと感じた。支援者支援に惹かれ、私も一員になりたいと考えた。

基調講演

支援者支援学の構築を目指して

冒頭では、長年にわたって、支援者支援に取り組んできたこれまでの歩みに想いをはせながら、記念すべき第1回支援者支援研究会が開催されたことに対して、感無量の想いと関係者への感謝の気持ちを語られました。

支援者支援の必要性という観点では、現状、児童相談所や児童養護施設等で働く職員の「安心・安全」が浸蝕されていることや人材確保・定着が困難となっている課題にも言及しつつ、支援者支援コーディネーターの存在がいかに重要であるかについて提言されました。

また、支援者支援コーディネーター養成講座で習得を目指すことになる『愛着の器支援』『共感疲労・共感満足・支援者支援自己チェック支援』『レジデンシャル・マップ支援』『人生脚本と養育観支援』といった4つの基本技能について簡単に紹介をされました。

最後に、支援者支援のさらなる展開として、学問的な成果を社会に還元することなどを目的とした「支援者支援学研究会」の発足に向けて準備中であることに触れられ、実践と学問の両輪でもって「支援者支援学」の発展を目指したいと抱負を述べられました。



支援者支援実践報告

希望の家では「お茶会などの職員交流の場の提供」「メンター制度（通称：おたすけ隊）」「複数のホームをまたいでホーム運営に関わる養育チーフの導入」など様々な職員を支援する取組をしているとのことでした。しかし、メンタル不調などによる休職者・退職者が発生し、さらに重層的に職員を支援する必要性を感じていた中で、支援者支援コーディネーター養成講座のことを知り、管理職3名と養育チーフ5名の合計8名が参加された経緯について報告がありました。

また、現在、2025年度の支援者支援導入を見据えて、発表者のお二人が支援者支援コーディネーターを兼任し、職員面談、グループ巡回、モニタリングシステムの実施等に向けて準備を進めているとのことでした。

最後には、職員が安心して働ける環境づくりや職員同士が語れる場の定着などを通じて、職員のメンタルヘルスの向上とともに、養育の質の向上といった期待について述べられました。しかし、自分たちで務まるのかどうかや職員の期待にどこまでこたえられるかなどの不安も語ってくださいました。支援者支援コーディネーターを支援する必要性が示唆される発表となりました。



対談・インタビュー

1. 職場の中に「語れる場」を用意しておくことの重要性

木村さんから、朝の打ち合わせを情報共有の場から語りの場へと転換させたという取組が紹介されました。特に、語る場に参加していたにもかかわらず退職が決まるまで本音を語れなかった職員がいたというエピソードを交えながら、日常の中に語れる場を仕組化することと同時に、上手く機能させるための組織風土づくりの重要性が強調されました。

能村さんから、機会の確保ばかりでなく、職員が安心して発言できる環境づくりも重要ではないかという点についても補足されました。

2. 支援者支援コーディネーターの疲弊への懸念

佐藤さんからは、支援者支援実践報告の発表を受けて、あらためて組織の中に支援者支援コーディネーターを支援する役割や機能を持つておくことの重要性を指摘されました。

木村さんも、コーディネーターが職員の気持ちに過度に寄り添うことで、コーディネーター自身が疲弊してしまう危険性が懸念されるため、適度な距離感を保った関わり方が必要であり、それがコーディネーターに求められる専門性の一つではないかといった意見をされました。

3. 語らない自由を保障し、その気持ちを認めていく

能村さんによれば、「人生脚本と養育観」を実際に体験した結果、他の受講者との間に親近感が湧いたり、子どもたちに関わるイメージができたなどの感想が報告されました。また、職員の生い立ちや背景にも目を向けていくことへの有用性や可能性に言及されました。

一方で、語らないことを選択される職員もあり、そこを尊重しながら対応することも高い専門性が必要になるのではないかと意見がありました。

4. 「必要な揺らぎ」を仲間とともに乗り越える

能村さんは、養成講座を学ばなければただの残業の一幕にしか過ぎなかったと振り返りながら、事務所のガラスが割られたときに、職員と共にガラス業者への連絡や見積もりをお願いするなどした時のエピソードを紹介されました。関わる機会が少なかった職員と二人でこの場面を乗り越えたことで、関係構築の機会となったと言及されました。

宇野先生は、この場面を「危機場面」として捉え、職員が責められるのではなく、共に乗り越える経験として重要視されました。佐藤さんも自身が養成講座の中で「必要な揺らぎ」という考え方について学んだことを紹介しながら、このような経験を1人で抱え込むのではなく、仲間と共に乗り越えることの重要性に気づかされたと言られていました。



質疑応答

5. 「語れる場」を通じて、語らない声にも思いを寄せる

総合司会の須江先生から、それぞれの施設で「語れる場」としてどのような機会が用意されているのかを尋ねる質問がありました。

出演者の方々からは、それぞれ「KPTシートを用いた面談」「チーフ会での意見交換」「朝の申し送り場面での語り」「メンター制度」「無記名アンケートへのフィードバック」など、それぞれが十分であるとは思わない中でも、様々な各施設特有の機会を用意していることが紹介されました。

木村さんからは、特に若い職員との会話などで趣味のことなど仕事と無関係のような話題をあえてしてみるといった聞き手側の工夫やファシリテーター役がいかにスキルを高めていくかということも大切ではないかと指摘されました。

藤岡先生も、「語らない自由を保障する」ことに触れ、職員ばかりでなく、子ども、家族、里親など語らないことがあったとしても、それでも思いを寄せていく姿勢と聞き手として言語化する力を日々メンテナンスしていくことの重要性について言及されました。



須江泰子先生（総合司会）



藤岡孝志先生 語らない自由を保障する

6. その方の人生における大きな局面に立ち会っている

来場者から「支援される側の職員たちが、守られるべきだという思いが強くなりすぎて、守られて当たり前、守ってくれなかった管理職やコーディネーターの方が悪いというような歪みは発生しないか」という質問が寄せられました。

藤岡先生は、「ファイトが湧いてくる」と応答し、そういう歴史を抱えていながら守られていて当たり前と思って生きてきた方が、思いのほか守られないってことに直面し、その方の人生における大きな局面に我々は立ち会っていると述べられました。そして、その方が自分で気づくようなペースでしっかりとエピソードを話題にしながら関わっていくということが大事であり、どんなことも未来の光に繋げていくというところが、支援者支援の真骨頂だと思っていると返答されました。

木村さんは、このことをアタッチメントの情動調整に似ているのではないかと指摘され、ピンチな時こそ寄り添ってあげることで、アタッチメントが強化される。それと同じようなことが、支援者支援でもいえるのではないかと続けられました。





子どもに関わるすべての大人を支援する会社

株式会社コドケン

<https://kodoken.co.jp/>

〒170-0053 東京都豊島区東池袋1-34-5 いちご東池袋ビル 6階

TEL. 050-3529-6307（代表）

E-mail. customer@kodoken.co.jp